

て育つ。

学歴

昭和十七年三月 朝鮮咸鏡北道会寧公立商業学校五年生を卒業す。

職歴（戦前の）

昭和十七年四月 南満州鉄道株式会社、上三峯駅貨物係勤務。

軍隊歴

昭和十九年十月 朝鮮羅南山砲連隊へ繰上げ入隊。

昭和二十年八月 ソ連と交戦し、終戦後はソ連に抑留され、強制労働に服す。

昭和二十四年八月 復員、舞鶴上陸。

職歴（帰還後）

昭和二十四年八月より昭和三十九年三月まで建設会社、そして食糧卸会社、さらに自動車販売会社等転々と遍歴す。

昭和三十九年四月 丸共特殊織物会社に入社。

昭和四十六年一月 税理士試験に合格し、会計事務所を開業、現在に至る。

上坂氏はいろいろな方面で、特に経理には緻密で経験豊かな方で（丸共特殊織物会社の経営は私の兄）、入社当初より経理課長として勤務していただいた。

氏は余暇を見ては勉強し、遂に大望の税理士試験に合格し、会計事務所を開設された。現在、支店を含めて二十余人の従業員と共に頑張っておられます。

この度、抑留中の労苦、特に記憶に残るものをお願いしましたところ、お忙しい中を快く引き受けて下さいました。

（福井県 佐々木 清左夫）

シベリア抑留物語

福井県 天谷 小之吉

孫が通う小学校の教頭先生（女性）が、私が平成七年に出版した『私のシベリア抑留記』を読まれて、「本当に苦勞されたんですね。うちの学校の生徒にぜひとも講演して下さい、時間を作って（約一時間は

ど)、お待ちします」と何回も申されましたが、口下手な私は壇上に立つことをお断りし、その代わり子供用に書き、一ページごと挿し絵(画家 佐藤清先生の許可)を挿入した原稿をお渡ししました。以下がそのときの原稿です。

おじさんの名前は天谷小之吉と言います。今日はおじさんが若いころにあった戦争の時の体験をお話します。

皆さんは、日本が戦争をしたことを知っていますか。今から約五十年前、日本は戦争をして負けました。戦争に負けることを「敗戦」と言います。

大勢の兵隊が爆撃や銃で撃たれたりして死んだり怪我をしました。兵隊でない人たちも、空襲などの犠牲になりました。空襲というのは飛行機から爆弾を落とすことです。これによって福井市も火の海になったことがあります。

戦争は、とても恐ろしく、悲しいことですが、実は、戦争が終わった後にも大変なことがありました。

それが「シベリア抑留」です。

おじさんは、戦争の時には満州という所にいました。満州は、今の中国に日本が領土を拡大し、新しくつくった国でした。戦争に負けたので、今はもうありません。

その満州では、国境を警備することが中心で、実際に大砲や銃を撃つたりすることはありませんでした。実際の激しい戦争は、東南アジアや太平洋が舞台となったので、「太平洋戦争」とも呼ばれています。

戦争の一番の相手はアメリカでした。

ところが、日本の敗戦はほぼ間違いないという時になって、ソ連が攻めてきたのです。日本が敗戦したのは昭和二十年八月十五日でしたが、ソ連が攻めてきたのはその八月に入ってからでした。つまり、もう日本に戦う力がないと分かってから、一気に攻撃をしてきたのです。

そのころの日本とソ連は、「戦争はしません」という国と国の約束をしていたのですが、ソ連はそれを破って攻撃してきたのです。おじさんたちはびっくり

して反撃しましたが、とても勝ち目がありませんでした。

そして、あつという間に捕虜となって、シベリアへ連れて行かれてしまったのです。

シベリアというのは、ソ連（今はロシアと言います）の東部にあり、真冬の福井よりも、北海道よりも、もっと寒い所です。

抑留というのは、戦争が終わっても、捕らえられて自由にならないことです。

おじさんたちはシベリアに抑留されたので、それを「シベリア抑留」と言います。

戦争が終われば、おじさんたちは日本へ帰れるはずでした。とにかく無事に家へ帰ることが一番の幸せに違いありませんでした。

ところが、戦争は終わったものの、敗戦してしまつたために、おじさんたちはソ連の言う通りにしなければならなくなつたのです。

戦争で死ななかつただけ良かったとは思いますが、シベリアでの生活はとても苦しいものでした。満州に

いた何万人もの日本の兵隊がシベリアに送られ、抑留されました。

シベリアでは、「強制労働」と言つて、ソ連から大変な仕事を命令されました。シベリアはとても寒く、開発が遅れていたので、森を切り開いたり、鉄道を敷いたり、石炭を掘り起こしたりという仕事を、おじさんたち日本人にやらせたのです。

戦争に負け、武器も取り上げられてしまったので、逆らうことはできませんでした。もし逆らつたら、せっかく戦争で生き残つたのに、ここでソ連に殺されてしまうかもしれません。それに、たとえ殺されなくても、日本に帰してもらえなくなるかもしれません。そう思うと、言う通りにするしかなかったのです。

おじさんが最初に行ったのは、ライチハという所でした。

大きな川を渡り、どこまでも続く大地を、昼も夜も歩かされました。途中にジャガイモ畑があり、そこでジャガイモ掘りをしました。スコップがなく、素手で土を掘り起こさなければなりませんでした。

ご飯など、もちろんありません。何を食べたと思いますか？ そのイモを茹でたり焼いたりして食べたのです。

そうやって、どこまでもどこまでも歩いて、イモ畑へ来るとイモを掘り、また、どこまでも歩き、またイモ畑へ来るとイモを掘りました。

そうして一カ月も歩いて、やっとたどり着いたのがライチハという所でした。

そこには家もなく、おじさんたちはテントの中に寝かされました。夏のうちは良かったのですが、十一月ごろになるとだんだん寒さが厳しくなってきました。信じられないと思いますが、夜には零下三〇度ぐらいになります。テントぐらいいは死んでしまいます。そこで、洞穴の中に入って寝るようになりました。

しかし、狭い洞穴に五百人もの人が寝なければならなかったのです、なかなか眠れません。皆が勝手に横になってしまうと寝る場所がなくなってしまうので、少しでも多くの人が寝られるように、一人ずつが頭と足を交互に並ぶようにしました。それでやっと、

一人が二十五センチぐらいの幅で横たわることができました。

ただでさえ窮屈なのに、右を見ても左を見ても、隣の人の足があるのです。ちょっと想像してみてください。臭いもするし、嫌なものです。でも、そうでもしなければ、とても寝ることができなかつたのです。まるで犬小屋のようでした。

ライチハでは、石炭を掘ったり鉄道のレールを運んだりしました。機械がないので、ほとんど手作業でやりました。

冬は本当に寒く、北極や南極にいるみたいでした。石炭を掘ろうにも、地面が鉄のように凍りついていきます。くいを打ってもちっとも穴が掘れず、体はほとんど疲れていききました。

地面が凍るほどですから、人間の体も凍ってしまいます。「凍傷」と言って、指や耳や鼻などが凍ってしまい、血が通わなくなつて腐ってしまうのです。ですから、おじさんたちは体のあちこちを手でさすったり、足踏みをしたりして体を温めました。

ある日、日中でもひどく寒い日があり、おじさんも耳と鼻が凍傷になりました。血が通わないので色がどす黒くなり、腐ってしまったらどうしようと心配でしたが、春になってやっと元に戻りました。

それほど寒いというのに、おじさんたちは戦争が終わった時の八月の服装のままでした。夏の服で、こんな寒い中で生きなくてはなりませんでした。

鉄道のレールを運ぶのも、重いレールを肩に担いで歩くのは重労働でした。肩が腫れて、痛くてしょうがありませんでした。しかも、地面が凍っているのでツルツル滑り、転んだりしたら重いレールに押し潰されるので、とても危険でした。

毎日、そんな厳しい仕事をして、食事はイモやトウモロコシのようなものぐらいしかありませんでした。米のご飯など、一度も食べることはできませんでした。ちゃんとした物を食べなければ、とても働く力は出てきません。皆さんも、今日、お昼のご飯を食べなければ、歩いたり走ったりする元気がなくなってしまうでしょう。おじさんたちも、栄養がなくなってしまう

が落ちてきました。

寒さと栄養不足で、たくさんの人が死んでいききました。戦争で運よく生き残ったというのに、日本へ帰れず、死んでしまった人たちのことを思うと、本当にかわいそうです。

おじさんは冬を何とか乗り切りました。春になると少しは楽になりました。

そのころの食事のことを、もう少しお話ししましょう。例えば、朝は「ポミー」という食事だけでした。ポミーというのは、トウモロコシを潰して煮ただけのもので、ちっとも食べた気がしません。それだけ食べて仕事に出なければなりませんでした。

昼は、乾燥させた食パン、厚さ一センチほどのものを一人二枚か、少ない時は一人一枚半。そしてポミーの入ったスープでした。夜も、それがもう少しになりました。お米のご飯もなく、お腹いっぱい食べられないようなことは一度もありませんでした。

そんなある日、近くの倉庫が火事になりました。焼

け跡から倉庫の中にあつた砂糖が出てきたので、それを誰かが拾ってきて皆に分けました。皆、アリのようが集まってきました。おじさんも少し分けてもらいました。甘いものは久しぶりだったので、おいしくいただきます。

ところが、次の日、私だけお腹が痛くて痛くてしかたなくなりました。

急いで病院へ連れて行ってもらい、お医者さんに見てもらいました。すると、「とにかくすぐ手術しなければならぬ」と言われ、おじさんは手術を受け、入院しました。

手術は成功し、おじさんは助かりました。手術の後は痛かったです。入院している間は辛い仕事に出なくていいので、それだけはホッとしました。

退院してからも、すぐには力仕事は無理なので、おじさんはしばらく食堂で仕事をする事になりました。皆の食事を作ったり、片付けたりする仕事です。食事の時には忙しくなりましたが、外へ出て行って力の要る、しかも危険な仕事をするのに比べれば、恵ま

れていたと思います。

少しずつ体力も回復して、おじさんは元気になりました。

ある昼休み中の出来事です。可愛らしい子供の声で、こんな歌が聞こえてきました。

「雨、雨、ふれ、ふれ、かあさんが、じゃのめでお迎え、うれしいな、びっち、びっち、ちゃぶ、ちゃぶ、らん、らん、らん」

一休みしていたおじさんも、ほかの人たちも、思わず声のするほうへ集まりました。すると、レコードが鳴っていました。(最近レコードはあまりなくなつて、CDになっていきますけどね)

ライチハに来て、もう二年近くになろうとしていました。懐かしい日本の、懐かしい歌声でした。集まった人たちは、ふるさとの風景や家族の顔を思い出したりして、思わず涙ぐんだりしました。

一体誰が、いつの間にこのレコードをかけたのか、それはわかりませんでした。その出来事は、これが最初で最後でした。とても不思議な、不思議な出来事

した。

でも、この出来事があった、おじさんは、「どんなに辛く苦しむことがあっても負けないで、生きて日本へ帰ろう」という気持ちが一層強くなりました。

それからしばらくして、食堂で顔なじみになったソ連の女のお医者さんから、「ザビータヤという所へ行く」と日本へ帰ることができるとも聞きました。ザビータヤという所で、日本へ帰る船に乗る日本人を集めていると言うのです。ただし、絶対に帰れるという保証はありません。もしかすると、もつと奥地の厳しい仕事に行かされるかもしれません。それぐら이었다ら、今の場所にいる方がいいかもしれないのです。おじさんは迷いました。

でも、やっぱり早く日本に帰りたいと思ったので、おじさんは思い切ってザビータヤへ行くことにしました。

トラックに乗せられて、おじさんはザビータヤへやって来ました。

ザビータヤは、体の弱い人のための療養所になって

いました。おじさんは手術の後だいぶ元気になりましたが、何とかもぐり込むことができました。

ある日、朝礼の時、一人のお医者さんが前に出て、「この言葉の意味がわかる者は手を上げてくれ」と言った後、「あっぱんけ」と何度も叫びました。おじさんは、ぶっと吹き出してしまい、笑いながら手を上げました。

皆さんは「あっぱんけ」なんて、もう聞いたことがないかもしれません。家に帰ってお父さんや、お母さんや、おじいさんや、おばあさんに聞くとわかるかもしれません。

「あっぱんけ」とは、トイレのことです。福井県だけの方言で、昔は「あっぱんけ」と言ったのです。だから、その意味がわかるということは、福井県の人だということですよ。

おじさんのほかに、十五人ほどが手を上げていました。朝礼の後、そのお医者さんと、手を上げたおじさんたちが集まり、お互いが福井県の間人だということを確認し、励まし合いました。「お互いががんばって、

きつとふるさとへ帰ろうな」と、手を取り合ったのでした。

ザビータヤ療養所では重労働がなかったので、体力はめきめき回復してきました。

半年ほどすると、もう一度、場所を移ることになりました。今度は、ピラカンという所に行きました。ここでは、松や杉の木を切ったり、大理石という石を掘って磨いたりしました。また、ピラカン駅で貨車に木材を積み込んだりしました。どれも大変な仕事でしたが、初めのころのようにバタバタと人が死ぬことはなくなりました。

ピラカン駅に入って来る列車には、これから日本へ帰る人たちの姿もありました。おじさんたちは時々その列車を見送り、「早く自分たちも日本へ帰りたい」と思いました。

昭和二十三年七月、休憩時間にソ連の兵隊が来て、「福井県の者はいないか」と聞きました。「はい」と手を上げたのはおじさんだけでした。ピラカンにこの時いたのは、福井県ではおじさんだけだったようです。

ソ連の兵隊によると、「福井県で六月二十八日に大きな地震があった」ということでした。ソ連の新聞にそのことが書いてあったので、それを教えてくれたのです。福井地震は大変大きな地震で、倒れた家に押しつぶされたり、火事で焼けたりして、何千人もの人が亡くなりました。

おじさんは、家族のことが心配で心配でなりませんでしたが、どうすることもできません。ただ、早く帰って無事を確かめたいという気持ちでいっぱいになりました。

それからしばらくして七月十三日、ソ連の兵隊が来て、「もう仕事をしなくていい。君たちは日本へ帰れるぞ」と言いました。ついに日本に帰れるのです。皆、「やった、やった」と飛び上がって喜びました。

次の日、さっそくピラカンを出てナホトカへ向かいました。ナホトカには大きな港があり、そこから船で日本海を渡って、京都府の舞鶴という港へ行くのです。

ナホトカに着いてから船に乗るまで二十日間あります。

した。その間、おじさんたちは港の石垣を造る仕事をさせられました。そうやって、最後の最後まで仕事をし、ようやく八月九日に船に乗り込みました。

船は「遠州丸」という名でした。おじさんを初め約二千人の日本人がそれに乗り、港を出発しました。

そして、八月十二日、舞鶴に着きました。舞鶴の港が見えてくると、皆、甲板に出て大喜びしました。うれしくて涙が出ました。

舞鶴から電車を乗り継いで、鯖江へ帰ってきました。鳥羽中の駅で降りると、お父さんと親戚の人たち十人ほどが迎えに来てくれました。急いで家に帰ると、そこにはお母さん、お姉さん、妹たち、そしてたくさんのお親戚の人たちが待っていました。皆、涙ながらに喜んでくれました。

おじさんも本当にうれしくて、生きて帰って来れたことに感謝して、お仏壇に手を合わせました。

シベリア抑留は、今、思い出しても辛く苦しい出来事でした。おじさんよりも、もっと長くシベリアにいた人たちもたくさんいます。不幸なことに、シベリア

で死んでしまった人たちもたくさんいるのです。

でも、おじさんは最後まで生き抜いて、愛する日本へ帰り、愛する家に帰ることができました。それだけに、生きることの大切さ、命のありがたさを感じます。

もし、おじさんがシベリアで死んでしまっていたら、今、こうして皆さんにお話することもできませんでしたし、おじさんの息子や孫も生まれることができませんでした。

シベリアで生き抜くことができたのは「絶対死んでなるものか」「必ず日本へ帰るんだ、お父さんやお母さんに会うんだ」という強い気持ちを持ち続けたからだと思います。そして、仲間同士でも「がんばれ、がんばれ」と励まし合ったからです。

ですから、人間はどんなに苦しいことがあっても、どんな辛いことがあっても、強い気持ちを持って、一生懸命生き抜いて、絶対にあきらめたりしてはいけません。そして、友だちを大事にして、仲間外れにしたりせず助け合うようにしましょう。そのこと

を最後に皆さんにお願いして、お話を終わります。

シベリア抑留記

長野県 中山 麻人

出生から軍隊生活

私は、大正十一（一九二二）年一月一日、長野県上伊那郡美和村で生まれた。体重、昔流で一貫二百匁、生まれながらに頑丈だった。

当時、百姓の子は上級学校へ進学する者は極めて少なく、一クラス二、三人であった。

昭和十七（一九四二）年七月、当時の伊那町伊那図書館において徴兵検査を受けたが、当時の日本男子ならば全員が経験したことである。型通りの検査が終わり最後の検査官（陸軍中佐）のところで「甲種合格」と言われた時は正に天下を取った気分であった。

十月頃「兵科騎兵 昭和十八年一月十日金沢市騎兵第五十二連隊へ入営スベシ」の通知を戴いた時は、本

人はもちろん、家族一同大喜びで家門の誇りとまで言われていたが、本当の両親の気持ちはどうであったか知る由もない。

一月八日、雪の校庭で同級十人程だったか壮行会が行われ、翌々日、金沢市騎兵第五十二連隊の門をくぐった。配属は、機関銃中隊、重機関銃二個小隊、速射一個小隊（二門）であったが、体格が良いからと速射小隊に配属された。速射砲は当時、対戦車砲の秘密兵器と言われていた。

午前は乗馬訓練、午後は速射砲の訓練と若い体もくたくたであったが、騎兵は機敏迅速がモットーで、営内にも「駆足」と書いた立札がいっぱい立っていた。二カ月の訓練が終わり前期検閲が終わり、三月十一日夜、軍装をして営門を出発。十二日、下関で乗船、朝鮮を経て三月十六日、満州牡丹江省樺林第九師団騎兵九連隊に転属、いよいよ本格的な新兵教育が始まった。馬部隊はすべてが荒かった。朝、起床ラップで点呼の後は駆足で厩へ。蹄洗、餌付が終わり朝食の時には味噌汁は冷えきっていた。